

Hukutana ふくたーな

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・ニュース

The Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi

31 August 1998 No. 5



Binadamu Hukutana

narrator: Kiptalam Cheboi
(Discoverer of *Samburupithecus*)

Ukiwa na vitu kwa mkono wako, peana. Babu zetu walituongozaka (ongozanga) na neno hili. Ukiwa na ng'ombe mbili, peana moja. Sababu, hata ungekuwa na ng'ombe kumi, zinaweza kumalizika ndani ya miaka miwili tu juu ya kukosa mvua, ugonjwa, na wizi. Ukisaidia mtu, siku moja utasaidiwa kweli. Kama huna chochote upokee mgeni vilevile. Mungu atajua kwamba huna kitu, na itakusaidia. Urafiki ni mali ya mwanzo na ya mwisho. Hivi tumekaribishwa vizuri hapa tangu jana, tunashukuru kabisa na ninakumbuka fumbo moja la Kiswahili. Milima haikutani, lakini binadamu hukutana.

山と山は出会わないが、人は……

キプララム・チェボイ（化石掘り名人）

日本の皆様、近ごろお国ではいろいろ物騒なことが多いようで、お見舞い申し上げます。困難に出会った時、ケニアではどのようにそれを乗り越えるように教えているのでしょうか。むかし長老たちに習った言葉をお伝えしたいと思います。「君が何かもっていたら、自分だけのものにしていいで、人と分けあいなさい。」あなたが牛をたとえ10頭持っていても、それを自分だけのものと思って独占しているつもりなら、2年もしないうちに1頭もいなくなってしまうかもしれません。干ばつもあるし、病気や盗難もあるでしょう。困っている人がいたら、たとえ手元が如意でも、できるだけ助けてあげなさい。そうすれば、あなたが本当に困った時にも助けてもらえるものです。友達こそが本当の財産です。たとえ、戦争にまきこまれても、爆発があっても、どんな困難の中でも、それを忘れてはいけません。そう、スワヒリ語のことわざにもいうではありませんか。山と山は出会わないが、人は出会うものだ、と。Milima haikutani, lakini binadamu hukutana.

センター・ニュース

できごと

8月

- 1日 国松豊氏（京都大学靈長類研究所）・茶谷薰氏（大阪医科大学）来訪。
- 3日 植松久美子氏（筑波大学大学院環境科学研究科）・菊川水際氏（筑波大学大学院歴史・人類学研究科）来訪。
中村達氏（農水省国際農林水産業研究センター/国際昆虫生理生態学センター、昆虫生態学）来訪。
- 4日 木村李花子氏（馬の博物館）・百瀬悦子氏（北海道大学理学部）・田中理映子氏（名古屋大学農学部）・石山勝敏氏（写真家）来訪。
池庄司敏明氏（国際協力事業団派遣専門家、害虫学）来訪。
- 6日 宮本正興氏（大阪外国語大学）来訪。
- 7日 ナイロビ中心街でビル爆破事件発生。研究者の安否について問い合わせ多数。
- 10日 佐藤俊氏（筑波大学歴史・人類学系）・菊地美貴子氏（筑波大学大学院環境科学研究科）・伊藤太一氏（筑波大学農林工学系）来訪。
小馬徹氏（神奈川大学）・中林伸浩氏（金沢大学文学部）来訪。
- 11日 松田素二氏（京都大学文学部）来訪。
澤田順弘氏・中山勝博氏（島根大学総合理工学部）・植村善博氏（佛教大学文学部、自然地理学）来訪。
Muriithi Kinyua 氏（ナイロビ大学、産業デザイン）来訪。
- 12日 J. P. Patel 氏（ナイロビ大学、地球物理学）来訪。
竹村景子氏（大阪外国語大学、アフリカ地域文化）来訪。
- 12～18日 足達・安渓両駐在員、研究所訪問ならびに予備調査のため、西ケニア Suba District、Kisumu、Kakamega Districtなどを訪問。
- 21日 Pius Aggsey Omondi 氏（地域社会開発）来訪。
John Prospero 氏（「Business Africa」）来訪。
August Kanyunyi Basabose 氏（コンゴ自然科学研究センター、靈長類学）来訪。
- 24日 仲谷英夫氏（香川大学工学部）来訪。
- 25日 Octavian Gakuru 氏（ナイロビ大学社会学科主任）来訪。
- 27日 John K. Omuse 氏（元ケニア・トリパノソーマ研究所所長）来訪。
Simiyu Wandibba 氏（ナイロビ大学アフリカ研究所所長、考古学）、北村光二氏（弘前大学人文学部）、仲谷英夫氏を招待して研究連絡会（Seoul Garden Restaurantにて）。今後の研究協力のあり方について率直に懇談。
- 29日 第131回学振セミナー開催。セミナー後、屋外で懇親会。
- 30日 澤田昌人氏（京都精華大学）家族とともにコンゴ民主共和国より無事到着。

研究者往来

- 菊地滋夫氏（明星大学人文学部）7月22日～9月12日、ケニア海岸部後背地におけるイスラーム化に関する社会人類学的調査のため、ケニア共和国 Kilifi District を訪問。
- 中務真人氏（京都大学理学部）7月25日～10月12日、文部省科学研究費補助金国際学術研究「東アフリカにおける類人猿の進化と人類起源の研究」による北ケニア Samburu Hills 地域の発掘調査などのため、ケニア共和国およびマダガスカル共和国を訪問。
- 仲谷英夫氏（香川大学工学部）7月27日～9月7日、文部省科学研究費補助金国際学術研究「エチオピアにおける人類起源と進化」に関する調査のため、エチオピアおよびケニア共和国を訪問。
- 伊藤太一氏（筑波大学農林工学系）8月1日～22日、国立公園（保護区）における住民との関係にかんする調査のためケニア共和国を訪問。
- 国松 豊氏（京都大学靈長類研究所）8月1日～29日、文部省科学研究費補助金国際学術研究「東アフリカにおける類人猿の進化と人類起源の研究」による北ケニア Samburu Hills 地域の発掘調査のためケニア共和国を訪問。
- 宮本正興氏（大阪外国語大学）8月4日～9月1日、スワヒリ語の種々性とスワヒリ民話に関する調査のため、ケニア共和国 Lamu およびタンザニア連合共和国 Zanzibar を訪問。
- 松田素二氏（京都大学文学部）8月7日～9月7日、文部省科学研究費補助金国際学術研究「実践コミュニティーと人類学的認識」によるナイロビおよび西ケニア地域の職人共同体の調査のためケニア共和国を訪問。
- 植村善博氏（佛教大学文学部）8月10日～9月2日、北ケニア地域の地形調査、主として第四期後期の編年と環境変化の調査のためケニア共和国を訪問。
- 小馬 徹氏（神奈川大学外国語学部）8月10日～9月16日、キプシギス人の社会人類学（民族誌学）的調査のため、ケニア共和国 Rift Valley 州 Bomet District を訪問。
- 中林伸浩氏（金沢大学文学部）8月10日～10月1日、イスハ人のキリスト教会の現地調査のため、ケニア共和国 Kakamega District を訪問。
- 竹村景子氏（大阪外国語大学アフリカ地域文化専攻）8月11日～12月17日、スワヒリ語・スワヒリ文化の地域的種々性に関する調査のため、ケニア共和国およびタンザニア連合共和国を訪問。
- 澤田順弘氏・中山勝博氏（島根大学総合理工学部）8月11日～23日、文部省科学研究費補助金国際学術研究「東アフリカにおける類人猿の進化と人類起源の研究」による北ケニア Samburu Hills 地域の地質調査のためケニア共和国を訪問。
- Naomi W. N. Maina 氏（ケニア・トリパノソーマ研究所）8月19日～28日、第9回国際寄生虫学会議などに参加のため千葉市、帯広市を訪問。

はじめまして（研究者自己紹介、順不同です）

茶谷 薫（CHATANI Kaoru, 大阪医科大学・第一解剖学教室）

靈長類のロコモーションと非移動時（採食・休息中など）姿勢の研究を行っています。

これまでニホンザルを餌付け群と京大靈研放飼場で観察してきました。今回ニホンザルと比較研究するため、サバンナモンキー類を見にケニアへやってきました。海外調査は行ったことはなく、アフリカも初めてなので、期待と不安が半分半分といったところです。ナイロビは恐ろしい街だと散々脅されてきましたが、学振事務所の方々やここを訪れる方たちに色々お世話になって、かなり気が楽になり、大変感謝しております。

木村李花子 (KIMURA Rikako, 馬の博物館)

横浜・根岸にある「馬の博物館」(財団法人馬事文化財団)で学芸員として働いています。ケニアでの調査は、社会人学生として籍を置いている名古屋大学(大学院生命農学研究科博士課程)に提出する論文のデータ収集が目的です。社会形態の異なる2種のウマ属、グラントシマウマとグレビーシマウマを対象に、主にコミュニケーション行動の比較をおこなっています。なかなか助成金が取れず調査費用の調達に苦しんでいます。

百瀬悦子 (MOMOSE Etsuko, 北海道大学理学部生物学科4年)

今回、木村さんの研究のお手伝い、ということで参加させていただきました。海外に出るのは実は初めてでしたが、アフリカは私の夢の大陸であり、初めてゆく国がケニアというのは私にとってこの上ない幸せでした。シマウマのシマは私を悩ませましたが、最後にはすっかり個体識別にも慣れ、大変充実した日々を送ることができました。何にしても、言葉は大事だなーと痛感しました。

田中理映子 (TANAKA Rieko, 名古屋大学農学部資源生物学科4年)

わたしは今、行動学を勉強しています。ケニアは私が一番行きたい国だったので、木村さんから誘いを受けたときはとてもうれしかったです。ケニアに行った感想は、意外に都市部は発展していたけれど少し離れると貧富の差がはげしいことに驚きました。人はみんな親切でとても友好的でした。また、是非訪れたいと思っています。

菊川水際 (KIKUKAWA Migiwa, 筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程)

北ケニアのマルサビット周辺に牧畜民レンディーレが開拓した村(ウラウラ)を中心に、約一年半現地調査を行う予定です。ウラウラでは、トウモロコシとマメを主要作物とした農業が雨季に行われ、乾季にはウシのミルクが換金・消費のために重要視されています。今回の調査では、ウラウラでの生業活動と牧畜集落とのつながりに関するデータを収集することで、社会経済変化に対応している人々の状況を捉えてみたいと考えています。

菊地美貴子 (KIKUCHI Mikiko, 筑波大学大学院環境科学研究科修士課程)

8月のはじめにケニアに来ました。約一年半、北ケニア・マルサビット県のコルに滞在する予定です。コルではラクダ遊牧民・レンディーレの集落に住み、彼らのあいだでのもののやりとりと、その背後にある人間関係を調査します。

清水大輔 (SHIMIZU Daisuke, 京都大学大学院理学研究科博士後期課程)

化石靈長類の生息環境や生態を明らかにすることを目的として、歯牙形態の持つ機能的な役割、特に食性との関連を中心に研究しています。その基礎研究として、現在は主に現生の靈長類の歯牙形態や顎口腔領域の形態と食性の関係を研究しています。今回は、京都大の石田英実先生率いる北ケニア Sumburu Hills の中、後期中新世の Homonoid サイトの

発掘調査に参加するためにケニアを訪問しました。

辻川 寛 (TSUJIKAWA Hiroshi, 京都大学大学院理学研究科博士後期課程)

北ケニア、ナショラ地域をフィールドにヒト上科化石ケニアピテクス（約1500万年前）サンブルピテクス（約950万年前）の当時の生息環境の復元について周辺の化石哺乳類相を材料に研究しています。フィールドには7月20日から9月20日まで入り、化石の発掘を行い、その後1999年の1月まで、ナイロビの国立博物館で標本を扱って仕事をします。約5ヶ月間、よろしくお願ひします。

踊りながらその場を立ち去ってしまうだろう

——コンゴ女性の声への日本人学生の反応

安溪遊地（文化人類学、山口県立大学）

前号で紹介した、コンゴのバーで働く女性マリーさんの言葉を日本の大学1年生に示して「やりこめられているフィールドワーカーに愛の手を！」というレポートを書いてもらいました。これは、そのレポートからの抜粋です。単なる心理的反発などのはざれのレポートも多かったのですが、マリーさんの言葉に心を動かされ、自分のこととして考えてくれたものも少なくありませんでした。・・・は省略を示しています。かっこなどは、原文のままです。

日本人の心の奥をズバリのぞかれた

☆最初読んだ時、日本人の心の奥をズバリのぞかれた気がしてぎくりとした。

☆私達は文化人類学を学ぶ上で、様々な国の伝統や文化を知ろうとする。それは確かに興味をもち知りたいと思うからであろう。しかし、知った時に何を思うかといえば（研究者の方々はどうか知らないが）自分の国とはここが違う、やっぱり日本が一番いい、ということではないのか。この女性の言う通り、私たちが結局興味本位の目でしか、他国を見ていないことがあると思う。“手のうちを見せるのがいやなのです”これには一番強烈な印象をうけた。自分たちの文化を教えないというのは、どこかで、相手の文化よりも自分の方が優れているという感を、たとえ少しでももっているからではないか。それはフェアではないし、完全な差別である。しかし自分の中にも、多少なりともそんな意識があるのを感じたのが痛かった。

研究者は努力を見せて下さい

☆・・・この女性の言っていることがあまりにも的中していて心がチクリと痛むのであれば、どうにかして反論してやろうとたくらむ前に、忠告を素直に受け入れ、どのようにすればこうしたことを指摘されないですかのような研究ができるかを考えたほうが賢明だと思うのですが……
☆・・・私は文化人類学者の役割というものをはっきりと認識しているわけではありません。例

えば日本を中心に活躍している文化人類学者は異文化にとけこみ伝統と文化を後世に伝える努力をしているようです。もしそのようなものがなければ滅んでいた文化も多々あるに違いありません。しかし文化を守る役割が文化人類学者に与えられているのでしょうか。本物の文化人類学者と呼ぶべき人は存在しうるのか、この問題で考えさせられました。努力を見せて下さい。

差別の一一番の原因は

- ☆「・・・貧乏貧乏と言っていますが日本もはじめからこうであった訳ではないのです。あなた達もがんばれば今よりももっと状況がよくなるはずです。生れた国も育った環境も違う私達ですが、お互いが失いつつあるものを認識するために私達はあなた達の国までやってきたのですから」と答えるのだが、また反論されてしまい、立場がなくなり踊りながらその場を立ち去ってしまうだろう。
- ☆・・・ザイルもおそらく先進国と途上国の中に生じる矛盾によって不利益を受けている国なのであろう。・・・(我々は、矛盾によって利益を得ている国の側だから解答する権利はないと思うが) 日本など、世界大戦であれほど世界に迷惑をかけたのに現在では、世界有数の経済大国になっている。これは、日本人が勤勉な民族だからだという思い上がった考え方もあるが、私の思う所では、戦後地理的条件などもあり日本が反ソ反共の堤防となつたためと考える。・・・結局の所、原因是我々が目先の利益をうしないたくないばかりに、矛盾の上になりたっていることを認識せず、暮している。これが、差別の一一番の原因であろう。

Dance and flee: Japanese students try to answer a Congo girl.

(Continued from the last issue of this bulletin.)

ANKEI Yuji

(Ethnographer, JSPS Research Station, Nairobi)

I asked my students to try to answer the words of a Congo girl of their age who had blamed me for two faults: 1) not teaching our language and culture in exchange, and 2) the discrimination that causes the economic inequality between Japan and Africa.

Some of the students simply repelled from her words, but many of them listened to them sincerely. Here is an extract from their reports.

Show us your endeavour!

Her words shocked me. They penetrate the bottom of our heart...

Cultural anthropology informs us of interesting traditions and cultures of various countries. But such knowledge too often results in a banal impression that Japan is the best. We see others for mere curiosity. "Show what you have in your hands" makes clear our unfairness and discrimination that make us believe in our superiority to other people. My heart ached when I realised my own arrogance for the first time in my life...

Now I doubt whether there are anthropologists who deserve the name of researchers of human sciences. Show us your endeavour, you anthropologists!...

Causes for the discrimination

I would advise you to address her this way, "We Japanese were quite poor only several decades ago. So, you should feel encouraged to continue your economic efforts. I came here to find out the importance of our vanishing cultures both in Japan and in Africa." But she will make you lose all your points of discussion and you will flee from her dancing...

I don't think that we have the right to answer her questions since we profit from the discrepancies between so-called developed and developing countries. Japan has become an economic giant because of its geopolitical place during the cold war and not because of the diligence of its people. For fear of losing today's profit we make ourselves blind to the contradictions between countries and peoples. The Congo girl calls this blindness of ours as discrimination...

第131回学振セミナー

日時：98年8月29日午後2時－4時

話題：「アフリカの酒の秘密——アジア的視野からの探求」

話し手：安渓貴子氏（生態学）

使用言語：日本語・英語 参加人数：47名

要旨：安渓貴子氏は、自然と人間の関わりを微生物学から森の生態学までの広い視野から研究してきました。1978年からの足かけ2年間、コンゴ民主共和国の森の民ソンゴーラ人とともに暮らして、その経験を女性の生活誌の視点からまとめようとしてきました。今回は沖縄の銘酒・泡盛と同じ製法をもつソンゴーラ人の酒の秘密を中心に、世界の酒づくりの技術の中でのアフリカの酒の独自性について、スライドを交えて報告していただきました。

The 131st JSPS Seminar

Date: 29th August, 1998

Topic: Secrets of African liquors as seen from Asian perspectives.

Presenter: Dr. ANKEI Takako (Ecologist, Part-time Lecturer at Japanese Universities)

Language: Japanese and English. We welcomed 47 participants.

Summary: Dr ANKEI Takako is a specialist of bacteriology, ecology, and African foods and beverages. Based on her two years' field survey in the Democratic Republic of Congo, she discovered an alcoholic beverage made from the fermentation of rice. The basic principle for this liquor was proved identical with that of some Japanese liquors. (Bibliography; ANKEI Takako, 1988, Discovery of Sake in Central Africa: Mold-fermented liquor of the Songola. *Journal d'agriculture traditionnelle et de Botanique appliquée*. XXXIII, année 1986, Paris.)

—センターから—

懸案になっていた本誌の愛称ですが **Hukutana** (ふくたーな) に決定しました。これは、本号の巻頭言でおわかりのように、スワヒリ語のことわざの一部で、文字通りには「出会うものだ」という意味です。アフリカの山々と日本の山々が出会うことはないけれど、人間ははるかな旅をしてそこで受け入れられ、友になることができます。人的な交流に基盤をおいた学術交流を最大の目標とする学振の研究連絡センターとしての意気込みを示すものとして選びました。

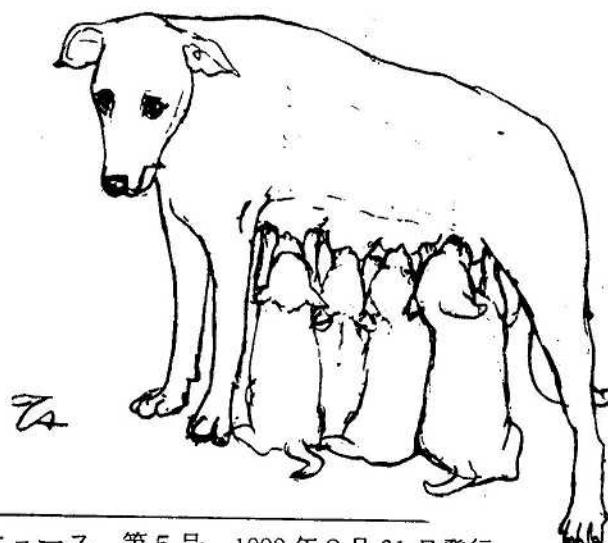
本号の巻頭言は、京都大学の石田英実氏の発掘技術者として長い経験をもち、サンブルピテクス発見の栄誉を担われたキプタラム・チェボイ氏を、ナイロビ学振のオフィスにお招きした時におっしゃった言葉からの抜粋です。掲載にあたってはご本人の快諾を得ました。

We have chosen a nickname **Hukutana** for this bulletin. This phrase, taken from a Swahili saying, means that people would always meet together. We are grateful for Mr. Kiptalam Cheboi for providing us of this idea. He has long worked as a specialist of fossil hunting under the supervision of Prof. ISHIDA Hidemi of Kyoto University.

編集後記

毎年8月は、日本から調査などにくる研究者がおおく、駐在員にとっては1年のうちでもっともいそがしい時期です。そのうえ今月は、コンゴ民主共和国での戦争の勃発や、ナイロビとダレサラームで爆破事件などもあり、それらの対応におわれていました。いずれの事件でも、さいわい日本人研究者で被害にあった人はいませんでしたが、罪のないおおくのアフリカ人の命がうばわれました。とくにコンゴの情勢については、同国の研究者たち、そして貴重な自然・文化遺産の命運が気がかりです。(太)

#大雨や地震があったり、ミサイルや毒物に襲われたり、さぞかし日本の皆様はご心痛のこととはるかなアフリカの空からお察し申し上げます。インターネット等で日本の情報も刻々伝わってきますが、身の危険を感じられた時は国外退去を含めて、あらゆる方策をおとりくださるように、おねがいいたします。(原発事故などでもあれば、どこへ逃げても、実際にこの星と運命をともにするしかないのですが。) 心あたたまる、ほっとするようなニュースがなかなかお送りできません。今回は、愛読者の皆様に番犬のジュニアが7匹の子犬を産んだ時の絵をお贈りします。どうぞ今後ともいろいろなジャンルのご投稿をおねがいいたします。なお、今回は、コピーでなく、印刷所に依頼してみました。出来ばえはいかがでしょうか。(遊)



日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・ニュース 第5号 1998年8月31日発行

編集・発行者/安溪遊地・足達太郎 発行所/日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

The Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi, No. 5, 31 August, 1998. Edited by ANKEI Yuji and ADATI Tarō. © 1998 by JSPS Research Station, Nairobi. All rights reserved. Published by JSPS Research Station, Nairobi, P. O. Box 14958, Nairobi, Kenya. Telephone: +254-2-442424 Facsimile: +254-2-442112 e-mail: jspis@swiftkenya.com